

# 人 間 学

---

濱 里 忠 宜

## 〈第1章 人間とはなにか〉

### 1 間のいのち

#### (1) 「人間」ということば

人間とは何でしょうか。人間が「生きる」ということはどういうことでしょうか。

私たちは、人間についてさまざまな角度から考えることができます。それは、哲学や宗教学であったり、教育学や文学であったりします。また、心理学とか生物学とか医学とか人類学であったりします。

それでは、「人間学」とは何でしょうか。「人間学」は、人間という存在を、その「いのち」の意味を、それらの学問を総合したようなしかたで、そしてもっと深い目で見ていこうとする学問です。ひと言で言えば、「人間とは何か」を問い求めていく学問です。

「人間」という言葉は、「人の間」と書きます。人間は、人と人の間（あいだ）においてのみ成り立つ存在です。人間は、たった一人では人間として成り立たない存在なのです。私たちが、ほとんど意識しないで口にしてしている「自分」という言葉も、「相手」なしには存在しないであろう言葉です。「相手」という言葉もそれだけで独立して存在しません。人間は「共に生きる存在」です。私たちは人間存在が、間においてのみ成り立つ存在であることをあらためて確認し、人間とは、**間柄的存在**だということをまず自覚しておきたいと思います。「人間」という言葉は、そのことをきわめてよく示唆しているのです。

それでは、「間柄」において何が生まれてくるのでしょうか。

一つには、人生のよろこびも悲しみもすべて「間柄」から生まれているということです。私たちは子どもが生まれてはじめて親になれます。また、子どもへの愛や子どもの成長のよろこびは、子どもという相手から与えられます。子どもが健やかに成長してくれない時、子どもが道を踏みはずしてしまう時、子どもが不幸にして親より早く世を去る時、親の苦しみや悲しみは計り知れません。

二つめは、人と人之间にはおのずと道ができます。ルールができます。人は、朝起きてから夜寝るまでさまざまなルールの中で生きています。人は生まれてから死ぬまでさまざまな約束の中で生きているのです。そうでなければ私たちの生活は成り立たないのです。私たちの人生はあり得ないのです。そして、そのルールは、人間の内面から生まれてくるものです。道徳あるいは倫理というものは、そうして熟成じゅくせいされたものと考えてよいでしょう。同時に、人間のつくり上げた大きな社会集団は、いつしか「法律」の形をとって組織化されてもいきます。

人間という存在は、そうして成り立っていくでしょう。人間とは、「間」（あいだ）において成り立っている「いのち」と言えます。

## (2) 「ひと」ということば

もう一つの日本語に「ひと」という言葉があります。この言葉の意味を考えてみます。

日本語の「ひと」という言葉には、よく見ていくと、上に述べた「人間」という言葉のもつ「間（あいだ）」の意味が隠されていることがわかります。それは、どのような形で秘められているのでしょうか。「ひと」というたった一語に、どのような「間」（あいだ）の意味が隠されているのでしょうか。

たとえばつぎの三つの文章には、どのような違いがあるか考えてみるとその意味がはっきりしてきます。これらの文章には、やはり「間」（あいだ）の意味が含まれています。ある関係性が隠されています。それはどのような形で隠されているのでしょうか。「ひと」という言葉は、実は、自分のことを意味したり、相手のことを意味したりしていることが解ります。

ア 「ひと」にものを贈る。「ひと」に親切にする。  
イ 「ひと」のまねをするな。「ひと」を馬鹿にするな。  
ウ 「ひと」が言っている。「ひと」聞きが悪い。

そして、「人間」という言葉同様、「間」（あいだ）のいのちとしての人間存在の意味を示唆していることがよく解ります。

## 2 考えるいのち

### (1) パスカルのことば

つぎに、人間とは何と言っても「考えるいのち」だと言うことができます。人間という生きものは、ほかの生きものと違って、途方もなく「考える力」をもった生きものなのです。パスカルという哲学者は、そのような人間を**考える葦**という言葉で表現しました<sup>(1)</sup>。それは人間が、風にそよぐ葦のように弱い存在でありながら、「考える」という実に偉大な力をもっているという意味です。人間は、たとえば目には見えないウイルスという極微の世界の生きものによってその大切ないのちをいとも簡単に奪われてしまいます。人間はそんな弱い存在です。その人間はしかし、世界を包み込んでしまうような途方もない「思考」の力をもっているのです。

それでは、人間という「いのち」のそのような能力を、**進化論の視点**で見えていくと、どのようなことが言えるのでしょうか。

### (2) 進化論の教え

今から300万年前、人間は立って歩くようになりました。いわゆる「直立歩行する人」(homo erectus)への進化です。この「直立歩行」ということがどのような意味をもっているのか考えていくと、人間といういのちの本質が見えてきます。

直立歩行とは、人間の4肢のうち2肢が解放されるということです。人間は、解放されたこの2肢で道具を作り、それを使うことを知ったのです。いわゆる「工作する人」(homo faber)への進化です。それは同

(1) パスカル Blaise Pascal (1623~1662) フランスの思想家、数学者、物理学者。上記の言葉は主著『パンセ』の中にあります。

時に、人間がものを考え、コトバを使う存在になったことを意味します。いわゆる**考える人 (homo sapiens)** への進化です。人間の脳が、時を経て大きくなってきたというデータもそのプロセスを示唆しています。

こうして見ていくと、直立歩行することが、人間といういのちを測り知れないほど複雑・高度な存在に進化させたと言えるでしょう。そして、この「考える」という偉大性が学問や道徳や芸術や宗教を生み出し、また、科学技術とか技術文明とか呼ばれるものを発展させて人間の生活を変えてきたと言えるでしょう。

そこで、そのような**人間の卓越性**を、もう一歩進んで、たとえば大脳生理的な視点で考えてみるとどのようなことが言えるのでしょうか。

### 3 よく生きるいのち

#### (1) 生まれつきの強さ

人間は、ただ生きているのではなく、よく生きていこうとしています。そういう生きものとしての人間とはどんな存在か、**大脳生理学**にならって考えてみたいと思います。

人間とは、まず他の哺乳動物同様、本能をもった生きものだと言えます。それでは、**本能 (instinct)** とは何でしょうか。それは、**生まれつきの、たくましく生きる力**だと言えます。すなわち、人間は、学習（練習）や経験なしに生きていくたくましさ（生まれつきの強さ）をもっている生きものということです。ものを食べれば自然に消化活動をしてくれます。それを吸収し、排泄してくれます。暑くなれば汗をかくようにできています。そのような自然の営みは、本能そのものであり、いのちの力と言えます。

本能には植物的な本能と動物的な本能が考えられます。**植物的な本能**とは、意識や意志とは無関係に、一定の刺激に対して一定の反応を示す、たくましい生命のはたらきを指しています。すなわち、意識や意志はともなわないが、まさしく**生きている**という生命のはたらきです。

植物は光のエネルギーを用いて二酸化炭素と水を吸収して有機化合物を合成（光合成）して成長します。じっとして生きていることがで

きます。人間も、脳の或る部分を損傷したら自分の力で何かをやろうとすることはできませんが、生きていることはできます。そういう植物的な機能をつかさどっている脳の働きがあるからです。上に述べた消化・吸収や排泄のはたらきも同様です。植物的な本能とはそういう力をもった機能です。しかし意識や意志は十分に働いていないと考えるわけです。

**動物的な本能とは**、生きていこうとする意識や意志が働いている、本能的な生命のはたらきです。すなわち、意欲や欲望など「生きていく」という生命のはたらきです。

私たちが何かをしたいと思い、何かをしようとするのはこの本能行動によるものです。この力を底にもっていて、私たちは生きていこうとするのです。人間の欲望は、その人生にさまざまな災いをもたらすこともあります。この欲望がなければ何かをしていこうとする営みは生まれません。

## (2) 生まれつきの弱さ

### 本能の弱体化 (instinct reduction)

このように、人間は他の動物同様たくましい本能をもっています。しかしその「たくましさ」は他の動物とまったく同等ではありません。他の動物に較べれば、ある意味で弱体化しているのだとすることができます。本能が弱体化しているということは、他の動物と較べて生きていく力が弱くなっていることをも意味します。長時間走りつづけるのも他の動物のようにはいきません。長時間水中に潜るのも魚のようにはいきません。したがって、何らかの学習（教育）なしでは生きられない弱い存在だと言えます。すなわち、「生まれつきの弱さ」をもっている存在なのです。したがって人間は、そのままほっておけば、真の「人間らしい人間」になることはできません。

本能の弱体化とは、少し整理すると、空を飛ぶ鳥や山野を駆け巡る動物たちと較べて、人間がどんなに弱い生きものであるかを示す言葉だと言えます。それは、生まれてきたばかりの人間の赤ん坊と馬や牛たちの子どもを較べてみればよく解ります。馬の子どもが、親と同じように走り回るようになるまでにはそれほど時間が要りません。人間はちがいま

す。歩けるようになるまでにはずいぶん時間がかかります。人間は、ほかの動物たちよりも多くの保護・養育を必要とする生きものであり、しかも、それには相当の時間や配慮が必要なのです。

### 生理的早産 (physiological premature delivery)

人間はまた、「生理的早産」の状態でもまれてくる弱い存在だとも言われています。「生理的早産」とはどんなことを言うのでしょうか。**生理的早産とは、通常化してしまった一種の早産状態を指します。**つまり、人間の赤ん坊は、常に早産状態すなわち未熟状態で生まれてくるということです。その早産状態の意味を考える時、私たちは人間がどんな存在であるかを深く理解することができます。人間の赤ん坊と他の高等哺乳動物の赤ん坊との違いを、「生理的早産」という視点から具体的に見てみると、人間という生きものと他の生きものとの大きな違いがはっきりしてきます。

### (3) 生まれつきの賢さ

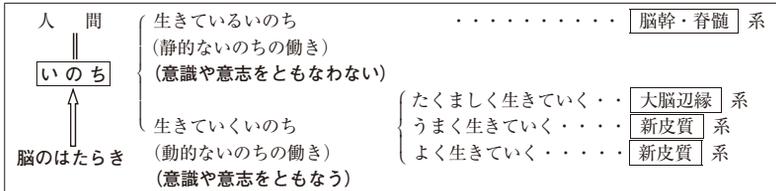
#### 適応と創造

先に述べた本能の弱体化ということは、視点を変えれば、人間が他の動物と違って、強力な本能だけの支配する生きものではないことを意味します。それは本能自体の弱体化によって、何らかの学習を必要とするようにできているということです。言いかえれば、本能以外に、学習できる能力をもった生きものであり、それによって、よりよき生 (life) を創り出していく存在だということです。言葉をかえれば**適応・創造**というきわめて優れた能力をもった存在です。すなわち「生まれつきの賢さ」を持った生きものなのです。

そのような、人間の優れた能力である「適応・創造」の営みをいまましまとめるとつぎようになります。

それは、変化する外部環境に適切に対処していく**適応行動**や、未来に目標を設定し、価値を追求し、その実現を図ろうとする**創造行為・人格行動**と呼ばれるものです。人間は、ただ「生きている」のではなく、何かを求めて「生きていく」存在です。それはしかも、「うまく生きていく」存在であり、「よく生きていく」存在なのです。すなわち、人間とは「よ

「生きるいのち」なのです。それが適応行動であり、創造行為です。生まれつきの賢さとは、このようなことです。それを大脳生理学的な視点で図示するとつぎのようになります。



#### 4 可能性のいのち

##### (1) 可塑性ということ

このように見てくると、人間は、生理的早産（未成熟）の状態です。生まれてくる弱い生きものでありながら、ほかの生きものとは違った、非常に優れた能力を持っていることが解ります。

生理的早産とは、言葉をかえれば、いわば「未完成」のまま生まれてくるということです。この未完成出生が、人間が弱い存在であることを示すものなのです。しかしまた、未完成のまま生まれてくることは、実は多くの可能性をもって生まれてくるということでもあるのです。すなわち、人間は未熟の状態生まれ、時間をかけて徐々によりよいものに変わっていくことができる賢い存在だということです。可能性のいのちです。この、人間に秘められた可能性のことを「可塑（かそ）性」とも言います。可塑性（plasticity）とは、何かに向かって自らを形づくっていく柔軟な能力（柔軟性）のことです。

これまで述べてきたことをまとめると、人間は、生まれつきの強さと生まれつきの弱さと、そして生まれつきの賢さをあわせもっている、実に神秘的な存在だということです。人間をより「人間らしくしていく」という教育の営みは、このことに基づいています。すなわち、ほかの動物のような強さはないけれども、みずからのうちに秘められた柔軟な力で環境に適応し、新しい環境を創り出し、人間としてのよい生き方を築いてゆける力をもっているものであり、その柔軟な能力を引き出して育てていく営みが教育だと言えます。「教育」(education) という言葉が、

educare（引き出す）というラテン語から来ているのはそういう意味を含んでいます。

## (2) 可能性の本質

人間の可能性を、もっと根本的な視点でとらえた人たちがいます。人間が本質的にもっている可能性を、ここでは、「可能性の本質」という言葉で表現してみます。そして、そのような視点に立っていた人たちの一、二の思想について述べて、人間と、人生と、そして教育の意味を考える一つの手がかりにしたいと思います。

### ソクラテスの「知と徳」

まず、西洋哲学の大きな流れの中で、いち早く「人間」というものに目を向けて根本的に探求しようとした、古代ギリシアのソクラテス（470～399B.C.）について触れておきます。ソクラテスはずぎのように考えています。

人間には、あらゆる経験に先立って「徳と知」が内在しているのだという考え方です。人間は本質的に徳（善さ）と知（正しさ）をもっているのだという意味です。そして人間は、そのような徳と知を「想起する力」をもっているのだと考えたわけです。「想起する力」とは、呼び覚ます力と考えていいかもしれませんが、自分の内に内在している徳（善さ）と知（正しさ）を、自分の力で引き出す力、とらえる力があるということです。少しむずかしい言い方になりますが、真理を認識する自発的な能力があるということです。そういう意味の、可能性をもった存在です。

### ソクラテスの助産術

ソクラテスは、このことを説明するのに、たいへん印象的な発想をしています。それは「魂の産婆術」（助産術）と呼ばれるものです。魂の助産術とはどのような考え方なのでしょう。

あらゆる経験に先立って徳と知が内在していると先に言いましたが、それは、人間が自らの魂のうちに徳と知を身ごもっているのだということです。人間は、みずからの魂のうちに、美しくよいもの（徳）と正しいもの（知）を宿しているのだとする考え方です。

そしてまた、知と徳は一つのものでなければならないとする考えを同時にもっていました。ほんとうの知は徳と合一しているというのです。そして、人間はいつもそれを生み出そうとしているのだという考え方です。その、徳と知の出産、すなわち魂の出産を助けてやるのが、哲学であり教育なのだと考えたわけです。それが、魂の助産術です。

ソクラテスの教えを受けた哲学者がプラトン（427～347B.C.）ですが、彼は、人間の心が正しい知を認識するこのような過程を *anamnēsis*（アナムネーシス 想起）という概念で説明した人です。人間にほんとうの知を思い起こす能力、ほんとうの知をとらえる力が備わっているから、真理というものが人びとに共有されることになるのです。

人間にはこのような本質があります。それをここではいのちの中にひそむ「可能性の本質」と表現しておきます。

### ルソーの「善なる自然性」

18世紀フランスの啓蒙思想家ルソー（J. J. Rousseau 1712～1778）は、人間の内に秘められた可能性とか本質というものをつぎのように考えました。

ルソーは、人間の可能性とは「善なる自然性」（*bonté naturelle*）だと言っています。善なる自然性とは、あらゆる経験に先立って、人間の内面に存在する力や意志や理性のことを意味しています。そういう秘められた総合力とも言えます。人間は、そういうすぐれた力をもった生きものだということです。

これも人間という「いのち」の本質を、根本的にとらえた視点と言えましょう。そして、ルソーにとっても、そのような自然性を守ることが教育のテーマだったと言うことができます。

### 生きている私たち

このように、人間とは、とても高度な、とても複雑なしくみでできている「いのち」です。そういう人間の姿を、思想家たちはさまざまな概念で説明してきたのです。

そこで私たちは、これまで見てきたような人間の姿を基礎にして、現実の、生きた人間のありようを見つめていきたいと思います。こうして

生きている「われわれ」とは、どのような存在なのでしょう。今、ここに生きている私たちの姿を「実存」という言葉で表現している人たちがいますが、その「実存」というものを、もっと身近なところで考えてみようというわけです。

人間は、時に静かにものを考え、時に喜びに溢れ、悲しみに沈み、時に怒りのために己れをなくしてしまう生きものです。また、人のために役に立ちたいと思いつつ、つい自分を中心に行動してしまう矛盾した存在です。つぎの章から、今こうして生きている私たちの姿を見つめつつ、この一度きりの人生をどう生きたらよいかを探ってみたいと思います。

## 〈第2章 惑いと悲しみ〉

### 1 惑いの世界

#### (1) 人間の弱さ

人間という「いのち」を、さまざまな角度から考えてきました。

それでは、いまここに生きている私たち人間を、あらためて見つめてみたいと思います。こうして生きている私たち人間はどのような存在なのでしょう。ありのままの姿を考えてみます。

仏教詩人で書家の相田みつをに、こんな詩（書）があります。

〈弱きもの人間／欲ふかきもの／にんげん／偽り多きもの／人間そして／人間のわたし〉

著書『にんげんだもの』に出てくる言葉です。

こんな詩もあります。〈つまづいたって／いいじゃないか／にんげんだもの〉。

また、もう一つの著書『雨の日には…』には、こんな詩があります。〈いろいろ／あるんだな／にんげんだもの／いろいろ／あるんだよ／生きているん／だもの〉。

人間とは、弱さや醜さを持ち、矛盾をいっぱい抱えている存在です。

そんな人間の姿をわずか数行の言葉で言い当てているのです。

ある中学で、不登校になってしまった女生徒に、何もしてやれなくて悩んでいた新任の女の先生がいました。子どもが不登校になった時は、その子の父もその子の母も、そして先生たちも、どうしてやることもできない無力感に陥ります。朝の登校の時刻になると、玄関までカバンを持って出かけようとする子が、まったく動けなくなります。体が言うことを聞いてくれなくなるのです。心の痛みが、体の痛みになっているのです。心理学の専門家で、これを「カラダ言葉」と表現している人たちがいます。

そんな女生徒に、新任の若い女の先生は、自分の本棚にあった一冊の本を貸しました。相田みつをの『にんげんだもの』です。「よかったら読んでみて…」。先生には、たったそれだけのことしかできませんでした。自分にとって心の深い慰めになっていたこの本を、十三歳の少女に貸してやるという、それだけのことしかできなかったのです。

ところが、不思議なことが起こりました。ある朝、その生徒が、先生の通勤路の途中に待っていたのです。驚きをおさえつつ先生が「お早う」と言葉をかけると、生徒は「お早うございます」と挨拶を返しました。そして、言ったのです。「先生といっしょなら学校へ行ける。毎朝ここで待っています…」。そう言ったのです。先生は胸がいっぱいになりました。そして『にんげんだもの』というこの本のもつ力をいっそう深く感じたのでした。それから二人は、毎朝並んで学校へ向かう日が続きました。

人間はみんな弱い存在です。あやまち多き存在です。「そうなんだよきみ、つまづいたって、いいじゃないか…」と、この本は語りかけているのです。人間のほんとうの姿をじっと見つめている人の書いた本です。だからきっと、十三歳の少女の胸にしみてきたのだと思います。そして、そんな本を与えてくれた先生とならいっしょに学校に行く…と語っているのです。それでは、人間はどうしてそんなに悩み、惑う生きものなのでしょう。

## (2) 人間の二重性

あやまったり、惑ったりする存在としての人間を、思想家たちは、さまざまな形でとらえてきました。ここで、18世紀の哲学者イマヌエル・カント（1724～1804）は、人間をどのように見つめていたかを考えてみます。一口に言ってカントは、人間を二重性においてとらえていました。二重性とはどのようなことでしょうか。

### 自然の法則

人間は、感覚・知覚などの感受性やそれに伴う感情や衝動・欲望もっています。たとえば本能や欲望もっています。また、憎しみや嫉妬の情動もっています。さらには、美しい音楽や絵にひかれる情操もっています。これらは、総じて「感性」(Sinnlichkeit) と呼ばれるものです。それは、人間のもつ一つの大事な「人間性」です。

人間には、もう一つ「知」のはたらき（能力）があります。ふつうは「知性」と呼ばれています。カントはこれを「悟性」(Verstand) とか「理性」(Vernunft) というのはたらきとしてくわしく説明しました。

人間は、行為をおこす時、感性のままに、気ままに振舞うこともできます。たとえば本能や欲望にまかせ、気の向くままに行動したいと思ってしまう。そして、そんな行動が「自由」だと考えられたりしています。しかしカントは、果たしてそうだろうかと考えます。本能や欲望のままに、気の向くままに行動することは、実は、人間が自然に持っている本能や欲望に拘束され、支配されているということなのです。少しむずかしく言えば、「自然の法則」に拘束されているということです。これが、ほんとうの意味で「自由」と言えるのだろうか…、と、カントは考えたのです。

### 自由の法則

人間以外の生きものは、すべて「自然の法則」に支配され、その法則の通りに生きています。森の獣たちも、鳥や虫たちも、本能のままに食べ、眠り、森をかけめぐり、空を飛び回ります。しかし人間は、どんなに眠くてもがまんして本を読んだり、仕事をしたり、スポーツの練習をしたりします。どんなに食べたくても、体に悪いことが解っている時は、

じつとがまんしたりします。本能や欲望をコントロールします。「自然の法則」通りに行動しません。それは、自分の「理性」で自分を「律する」ということなのです。もう少し簡潔に言うと**自律** (Autonomie) ということです。このような理性の自律を、カントはほんとうの**自由** (Freiheit) だと考えました。

人間は、嫌なことはできるだけやりたくないと思ってしまいます。重い物と軽い物が並んでいて、それを運ぶ役目を命じられたら、できたら軽い方を運びたいと思ってしまいます。しかしまた、それではいけない、そうしたら、ほかの人に重い物を押しつけることになるではないか、とそんなふうにも考えることができます。そうして、自分の気ままな思いを否定しようとしみます。そういうことをカントは「自律」という概念で説明したのです。そして、それがわれわれ人間のもう一つのとても大事な**人間性**だとしたのです。この二つの人間性の姿を、人間の二重性というふうに言うことができます。カントは、人間というものを、こんなふうに着実に分析し、その上で、美しい魂のあり方を求めようとした人でした。

こうして考えてくると、弱さとか惑いとかは、人間の自然の姿のように思えてきませんか。人間のもっている「悩む力」は、実は、とても大事な人間の能力だと思えてきませんか。

### (3) 人間の輝き

人間は惑う存在です。いつでも、欲望に負けてしまいそうになります。人の心を傷つけまいと思っても、つい傷つけてしまいます。そんな人間の姿を、相田みつをは、『人間だもの…』という本の中で書きつけています。こんな詩があります。

〈くるしいことだって／あるさ人間だもの／まようときだって／あるさ凡夫だもの／あやまちだって／あるさおれだ／もの〉

「あやまちだって あるさ、おれだもの」という言い方は、けっして自分の誤ちを自己弁護したり、正当化したりしているものではありません。「人間」としての「自分」の姿をしっかりと見つめた人の言葉なのです。

自分の弱さやあやまちをじっと見つめ、これからどう生きるべきかと真剣に考えている人の言葉だから人の心を打つのだと思います。自分は完璧ではないと、人生に対して謙虚な姿勢を失わないから人の心を動かすのだと思います。

「惑い」は、人間のすぐれた能力だと五木寛之<sup>(2)</sup>は言っています。惑いつつ、人生に謙虚になっていく人間の優秀性を指摘した言葉だと考えてよいのです。

私たちがものを学ぶということは、こんなふうに、「自分」という「人間」を深く見つめるための営みです。「人間学」はとりわけそんな学問だと思っただけでしょう。そうすれば、この人間を、ただぼんやり見ないで、人間の内面を見つめつつ、カントが求めた美しい魂のあり方を求めつづけることができます。美しいものに憧れる時人は輝きます。美しいこと、善いことに向かって汗をかく時人は輝きます。汗をかく時、人は心を洗い心を磨いています。輝いて生きるとはそういうことです。

## 2 悲しみの世界

### (1) さまざまな感情

カントも言ったように、人間には、感性としてのさまざまな感情があります。ここではそれを、心理学的な視点から見たらどんなことになるのでしょうか。

人間の感情の中で最も単純な感情は、ごくふつうの、気持ちがいいとか少し苦痛だとか感じる快苦感です。これは**簡単感情** (feeling) とも呼ばれます。それに対して非常に激しい、身体の苦痛さえ伴う感情もあります。激しい怒りとか激しい嫉妬とかの感情で、それらは**情動** (emotion) とも言われます。これらの感情は、どちらかといえば持続的なものではありません。単なる快苦感はいつまでも続くものではありません。また、激しい怒りは攻撃的で時に暴力的になりかねないこともあります。激しい嵐が過ぎ去るようにいつか消え去っていく可能性をもっています。しかし残念なことに、人間関係に深い爪あとを残すことがあ

(2) 五木寛之著『生きるヒント—自分の人生を愛するための12章—』文化出版局 1993年

ります。深い悔恨の念にかられることがあります。

同じ激しい感情でも、胸底深くずっとしまいきまされて、具体的な行動の原動力として花開いていく感情があります。その**持続する創造的な感情**を私たちは**熱情** (passion) と呼んでいます。この**熱情** (パッション) が人生を新しく築いていく大きな力であることは言うまでもありません。また、美しいこと、正しいこと、善いことに心動かされ、憧れゆく「**高度な感情**」があります。私たちはそれを**情操** (sentiment) と呼んでいます。それは、最も複雑で、最も持続的な私たちの精神 (こころ) の営みです。精神の美です。

## (2) 情操の世界

したがって「**情操**」(sentiment) という感情は、私たちの精神 (こころ) の最も深いところに培われるものであり、人間の卓越した人間らしさを示す感情です。たとえば、喜びや悲しみの感情や感動と呼ばれるものがそれであり、それは、人間を美しいものへと誘 (いざな) っていく力をもっています。それはむしろ知 (理性) と情 (感性) が一つになった世界です。

女の子をもつある母親が、こんなことを教えてくれました。

〈…娘が小さい頃でした。夕食の時間が来て、母親は、二階の子ども部屋へ向かって何度も娘を呼びましたがいっこうに降りてきません。遂にたまりかねて強い調子で娘を呼びました。すると幼い娘は、しくしく泣きながら姿を現わしました。「さっきから呼んでいるのにどうして早く降りてこないの?」と母親が言いますと娘は言ったのです。「だって、ヘレンケラーを読んでいたんだもの」。そう言って涙を流すのです。娘は、ヘレンケラーを読んでいて、感動で胸がいっぱいになって動けなくなっていたのです。〉

この時の涙は、感動の涙であり、悲しみに近い涙であり、表現しがたい深い精神の営みです。情操とは、こんなものです。そして、この感情は、長い人生において、心のどこかにずっと「心の糧」として持続していくでしょう。

くり返しますが、「悲しみ」は情操の一つの姿です。作家の五木寛之は言っています。

「悲しむことを忘れた人間に、本当のよろこびが訪れるわけではないとぼくは思います」。(前掲書3章「悲む(かなしむ)」pp.49-70)

そして、「深く悲しむものこそ本当のよろこびに出あうものだと思います」とも言っています。

長い闘病生活を経験した人が、健康のありがたさやよろこびを、健康な人の何倍も実感するように、人生の「悲しみ」はただのマイナス(負)体験ではないのです。マイナス(負)の中に、生きゆくプラス(正)の力がかくされています。涙を多く流した人は、それだけ人生の大事なものを失ったのではなく、波や風を経験しない人よりもずっと大きな「生きる力」を与えられているのです。人をやさしく包み込む力を身につけています。人生のマイナスは、けっしてマイナスだけではありません。それは、高度で複雑な「情操」となって、長く私たちの人生を支えつづけます。

板画家の棟方志功が、「悲しみは、人間の感情の中で最も深い感情なのです」と言ったことがあります。私たちに、「悲しみ」を見つめる目を教えてくれている言葉だと思います。むずかしく言えば、複雑で持続的な人間感情の深みに触れた言葉です。

そして私たちは、五木寛之が言うように、「悲しむべきときに悲しまない人間にだけはなってはいけない」と、あらためて考えておきたいものです。

悲しみを見つめることは人間を深く見つめることです。人生を深く見つめることです。

こうして、感情と呼ばれる「感性」の世界を考えてきましたが、これらの働きは、私たちの中にばらばらに存在してはなりません。そして、人間には、もう一つの「知性」という能力があります。したがって、この感性の世界が知性の働きによってうまく抑制され調律される時それらは美しい形で表現されます。先に述べた情操の世界は、そのような姿を言うのだと思います。述べたように、知と情が一つになった世界です。

私たちは、どのような生き方をした時、そのような姿を実現できるのでしょうか。

## 〈第3章 ことばの力〉

### 1 心の泉

人間だけが言葉を使います。したがって、言葉について考えることはそのまま人間について考えることになると言ってもよいでしょう。そこで、私たちの生活の現実に合わせて、言葉のもっている人間学的な意味を考えてみましょう。

言葉はいのちです。古代日本人は、言葉のもっている霊妙な力を言霊（ことだま）と表現しました。万葉集には「言霊の幸（さき）あふ国と語りつぎ言ひつがひけり」とうたわれています。言葉は生きていて不思議な霊的な力を宿しているという考え方です。言葉は、心といういのちの泉から湧いてくる「いのちの力」なのです。だから、豊かな心の泉をもっている人からは、清らかな流れの、人の心をうるおす言葉が湧いてきます。それはちょうど、喉が渴いている時水が私たちに力を与えてくれるように、私たちの心に生きていく力を与えてくれます。

しかしまた、私たちの心の水脈が涸れている時は、貧しい言葉で人の気持ちを後ろ向きにさせたり、人の心を傷つけたりすることがあります。それはどんな時でしょうか。まず、そんなことを具体的に考えてみます。

#### (1) 後ろ向きの言葉

心が後ろ向きの時には、私たちの言葉は、自分の行動を消極的にしてしまう言葉となります。心が前向きの時は、自分をも人をも励ます積極的な言葉となります。どのような言葉が自分を消極的にするのでしょうか。人に力を与え、人を励ましたりできる人は、何よりも自分自身をいつも前へ進めています。いわゆる前進的な人です。逆に、人の心を後ろ向きにさせるタイプの人、何よりも自分自身を後ろ向きにしています。いわゆる退嬰的な人です。そんな「言葉の風景」をいくつかの型に分け

て考えてみます。

### ①「ムリです」型

まず「ムリです」型とでも言うようなタイプの表現があります。何かものごとに向かう時、いつも、ものごとの**可能な条件**を考えようとしないうタイプです。一種の**マイナス志向（思考）**です。

たとえば、何かを頼まれたり、課題を与えられたりする時、二言目には「それはムリですよ」とか「そんなことはできませんよ」と口にするサラリーマンがいるものです。何かの提案がなされた時、「うまくいくのはほんのしばらくですよ」とか「そのうち、新鮮味がなくなりますよ」とか、すぐに批評してしまう人がいるものです。担当者が一生懸命考えたことを、そして真剣に行動していることを、言葉だけで批評しているのです。一種の**評論家タイプ**、**批評家タイプ**の人です。行動の前に、批評したがる傾向の人です。

たしかに、ことがらとしてはむずかしい問題ではありますが、何か可能な条件を求めようとする姿勢がどこか欠けているのです。そうではなく、いつも**前向きに**、前向きに考えようとする人がいます。「むずかしいかもしれないけれど、とにかくやってみよう…」と前へ進むことを考えている人がいます。そういう人の口からは、必ず「やってみます」という言葉がでてきます。そんな人は**評論家や批評家**ではなく、**つねに前進する実践人・協調人**です。社会はそんな人に好感を抱き、そんな人を求めています。

こつこつと実践する人の言葉には深みがあります。人の心に勇気を与えてくれるひびきがあります。言葉は、その人の心の泉から出てくるのです。

### ②「やめとく」型

ものごとに対して**関心領域の狭い**、消極的なタイプの人がいます。自分の興味・関心のあるものにだけ心が向くタイプの人です。それを「やめとく」型としておきます。

たとえば、「やってみないか？」とか「山へ登ろう」とか誘うと、決まったように「やめとくよ」と、なかなか腰を上げようとしないタイプ

の人がいるものです。自分を狭い世界に閉じこめて消極的な人間にし、好奇心を広げようとしないタイプの人です。言うまでもなくマイナス志向（思考）です。

いつもいきいきとしている人を観察していると、つねに好奇心を抱きつづけている人です。そんな人にとっては、「やめとくよ」という言葉は、いわば「禁句」のようなものです。「おもしろうそうだな」と身を乗り出してくるタイプの人です。やってみるうちに、そのおもしろ味を発見していくタイプの人です。そんな人は、いつまでも若々しく、永遠の青春とでも言える何かを持ちつづけている人です。

### ③ 「でいい」型

答えがすっきりしない、**主体性の弱い消極的なタイプ**の人がいます。何か爽やかでないものの言い方をするタイプの人です。

このタイプは、ほんとうはほかのものが欲しいが、まあこれでもいいよ、といったニュアンスが感じられてあまり好感をもたれない後ろ向きのタイプの人です。いっしょに食事に誘われてメニューを選ぶ時、「ごはんにする？パンにする？」と聞かれると、「パンでいいよ…」とめんどうくさそうに言うタイプです。「パンでいいよ」ではなく、「パンをいただきますよ」（パンがいい…）と言った方が、誘った人の心を豊かにすることは言うまでもありません。

### ④ 「いちおう」型

何か言われた時のための**自己防衛心**が心のどこかで働くタイプの人がいるものです。「仕事はうまくいっていますか」と聞かれて、「まあ、いちおうね…」などといった類（たぐい）の言葉が返ってくるタイプです。

よく言えば用心深さ、慎重さともとれる表現に聞こえますが、場合によっては**責任転嫁型**になりかねません。どこかすっきりしません。どうしてでしょうか。ゆっくり考えてみたいテーマです。

### ⑤ 「いいんじゃない」型

何かを相談したり提案したりすると、口を開くたびに「いいんじゃない…」という言葉が眩くように返ってくるタイプの人がいるものです。

表面的には共鳴しているように聞こえます。しかし、よく観察すると自分の哲学の上に立っていないタイプです。

単なる同調の言葉と、真の共鳴・共感から出てくる言葉はおのずから違ってきます。「いいですねえ」「やってみましょうか」といった言葉がそうです。「いいんじゃない」型のタイプの人の言葉は、真の共感から出てくるものではありません。

このように、心が後ろ向き時には、その言葉は、人の心にいきいきと伝わっていきません。「人間」とは「人と人の間」に成り立つ存在であり、言葉は、人と人の心を結んでいるコミュニケーションの媒体です。そして、この媒体は言霊（ことだま）であり、心の泉から湧いてくる「いのち」ですから、その力について、私たちは、もっともっと考えなければならぬことがあります。言葉は、いのちといのちを結ぶ媒体なのです。

## (2) 美しい言葉

それでは、真に人の心に伝わる言葉とはどんな言葉でしょうか。言うまでもなく、後ろ向きでない、人に生きる力を与える言葉です。それは、人の心に沁みていき、人の心を動かしていく力をもっています。言葉をかえて言えば、つねに前向きの姿勢を持っている言葉です。

### ①心のかけ橋となる言葉

言葉は、人の心と心をつなぐ、精妙に紡がれた糸のようなものです。あるいは心と心に架けられた「かけ橋」（コミュニケーション）です。そして、言葉の美醜は、先に述べたように、その人の心情や人格そのものを表すものですから、そのやりとりはコミュニケーションそのものの美醜となります。その人の人格からにじみ出る前向きの言葉こそが、豊かなコミュニケーションを成り立たせると言えましょう。しかし、心のかけ橋とならない言葉もあります。

一般に汚い言葉と言われるものは、相手を大切にしないところから発せられているものです。かけ橋にならない言葉です。すなわち、人間を

大切にしないところから発せられている言葉です。しかし、相手を大切にしないということは、実は**自分を大切にしていない**ということです。自分を汚（よご）しているということなのです。自分の心の泉が濁っている時は、当然濁った水が湧いてきます。自分の心を大切にし、人間らしさを求めない人の言葉がどうして人の心を動かすことになりましょう。どうして豊かなコミュニケーションが成り立つでしょう。

汚い言葉ではないが、汚いイメージを持った言葉もあります。たとえば、「屁でもない」「くそつたれ」「けつをまくる」などがそれです。しかし、それが使われる**文脈**の中で、著しく汚くなったり、言葉としてそれなりの効果をもたらしたりするものです。そのわかれ目は、その人が、言葉に対してどれだけ繊細な、どれだけ誠実な姿勢をもっているかです。その言葉の置かれる場所が、あるべき場所であるかどうかを解っているかです。言葉には**言葉の座席**があるのです。正しい座席を持っている言葉が、真に心のかけ橋になりうるのです。

## ②心をはぐす言葉

われわれの言語生活の中には、たった一言で相手の心理やその場の空気を変えてしまう表現があります。人の心を傷つけ、人の人生をこわしてしまふ恐い働きをもっている場合もあります。反対に、人の心をはぐし、和げてしまふ魔法のような働きをする場合もあります。それはしばしば**マジック・フレーズ**（magic phrase）と呼ばれます。

たとえば「恐れ入りますが…」とたった一つのフレーズが、その場の雰囲気を変え、人間関係を変えてしまいます。この小さなフレーズはまさしくマジック・フレーズです。

心をはぐす小さな一つの言葉が、いつしか人生の大きな支えになり、その人の人生を大きく変えてしまうことがあるのです。それが人生の大きな転機となったり、人の運命を変えてしまうことになったりします。小さな一つの言葉が、大きな**人間覚醒**となるのです。まさしく、人生の魔法と言わねばなりません。人間のほんとうの**出会い**は、そういうものを持っています。

### ③感謝や思い遣りの言葉

それではここで、もう少し突っこんで「美しい言葉」について考えてみます。

あらためて、美しい言葉とはどんな言葉か考えてみます。たとえばいつも感謝の気持ちを胸に秘めている時、あるいは思い遣りの気持ちがにじんでいる時、言葉は自然と美しい表現になっています。感謝の念も思い遣りの気持ちも豊かな心の泉から湧いてくるものだからです。

相田みつを<sup>(3)</sup>に「縁起十二章」という一文があり、「おかげさま人生」という副題がついています。縁起とは、この世の物ごとはすべていろいろな関係の中で起こったり消えたりするのであり、単独に存在するものは一つもないという仏教の思想です。この十二章は、その教えから「おかげさま」という「感謝」の意味を表したものです。そしてそれは、人間の美しさとか言葉の美しさとは何かを問いかけている示唆的な文章です。

たとえば、「聞いてくれる人のおかげでぐちもこぼせる」とか「後輩のおかげで先輩になれる」という章句などが出てきます。私たちは、自分一人では何でもできないのです。

また、含羞（がんしゅう）<sup>(4)</sup>を忘れない人の言葉には、どこか慎しみが漂い、それが一つの気品となっているものです。同じように、謙讓の気持ちのにじむ言葉は、つねに節度を保っているものです。それは一つの抑制の美と言えます。

節度や抑制のない言葉や人生が、どんな姿をしているかあらためて考えると、そこには含羞や謙讓の気持ちが欠落していることが解ります。

さらに、真に勇氣ある人は、けっして大言壮語（自分の力以上の大きなこと、大げさなことを言うこと）などせず、そしてやたら人を責めたりせず、いざという時は大切な事のために身を挺して行動します。そういう人は、どちらかといえばしばしば控え目であり、その控え目な言葉は、凝縮された深い味わいをもって伝わってくるものです。

真の勇氣は、もとより目立とうとする行為などではなく、思慮の浅い向こう見ずの行為などでもないのです。それは時に、行動を控えてしま

(3) 相田みつを『にんげんだもの』（角川文庫）

(4) 含羞＝はにかみ、はじらい。

うことがあるので臆病に見えることさえあります。そんな人の言葉は慎重で控え目です。きわめて**熟慮**された行動です。

古い時代の思想家たちは、このような行動のあり方を「中庸」という言葉で表現しました。「中庸」とは、無謀（過度）でもなく、臆病（不足）でもない、冷静な、**節度ある**行動（中庸）を意味します。そのような姿勢から出てくる言葉は、しっかりと人の心に伝わっていく美しい言葉なのです。

われわれは、上にあげたような言葉、即ち、感謝や思い遣りのある言葉、謙譲や抑制のある言葉、勇氣ある言葉、思慮深く節度ある言葉に励まされ勇氣づけられます。すぐれた文学がそうであるように、いい言葉は、われわれの人生を励ましてくれる言葉なのです。もちろん、強い調子の言葉も、力の入った表現も、真実から生まれてくるものは美しいひびきをもって人の心を打ちます。そして、いい人はいい言葉をもっています。いい言葉にはいつも人を勇氣づけ、人の気持ちを思いやる優しさが秘められています。美しい言葉とは、そんな言葉です。

## 2 母と子のことば

私たちの「いのち」の故郷は母の胎内です。その母なる存在から言葉を学んでいま生きています。したがって私たちが使う母国語のことを mother tongue（母の舌）とも言います。そこで、母と子の間に存在する言葉の深さについて考えておきたいと思います。

### (1) 「母」をうたう言葉

母を描いた文学作品の中には、当然のことながら、人間の出会いの原点である母なる存在の意味など、人間を考える示唆的な言葉が出てきます。ここでは二人の詩人の作品について触れてみます。

詩人三好達治（1900～1964）に「郷愁」という詩があります。こんな詩です。

〈一海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がゐる。そして母よ、仏蘭西（フランス）人の言葉では、あなたの中に海がある。〉

私たちは、この詩を読んでどのような思いを抱かされるでしょうか。海（mer）と母（mère）という二つの言葉が、詩人の魂の奥で深くつ

ながっていることについてどんなことを考えさせられるでしょうか。少なくとも、私たちはこの詩と共に、母という存在の深さや広さや、その存在の不思議さについて、さまざまな示唆的な言葉に出会います。それらについて考えてみたいと思います。

つぎのような詩があります。サトウ・ハチロー（1903～1973）の「母ありてわれかなし」と題するものです。

母ありて われかなし／母ありて われうれし  
 母ありて われよぢれ／母ありて われすなおなり  
 母ありて われ寒し／母ありて われあたたかなり  
 —これが不思議ではないのか不思議です

「母ありて われよぢれ」とは、母の不思議の何を意味するのでしょうか。

「母ありて われ寒し」とは、母の不思議の何を言おうとしているのでしょうか。くりかえして読んでいくと、母なる存在の深さがしみじみと読む者の胸に伝わってくる詩です。

同じくサトウ・ハチローには、「古き雛人形をかざりて」と題する詩もあります。

古き雛人形をかざりて／母を想う／母を想う／青白く／うすよごれし  
 官女の顔／母に似て／いとさみし  
 右近のたちはな／左近のさくら／母に教わりし言葉を／くちずさめば  
 ／尚さみし  
 菱もちよ／せめて母の手の如く／そりかえることなかれ

この二つの詩で一番わかりやすいことは、共通して母を思う時のかなしみやさみしさが歌われているということです。母という存在はしかし、なぜ「かなしみ」とつながっているのでしょうか。「かなしみ」とは何でしょうか。つぎの「たわむれに」という詩は、この母と子の不思議がよく表現されています。母という存在は、人間とは何かを教えてくれる原点でもあります。

たわむれに／母の似顔を描き／入日さす壁に鋸にてとめ／「お小遣  
 いちょうだい」と／手をさしだしぬ／壁の母／せめていいたまえ／  
 「又使いすぎましたね」・・・と

(2) 幼いこどもの言葉

つぎは、周郷博の『母と子のうた』（東都書房 1969）に出てくる作品ですが、子どもの言葉に関する一節を引用してみます。人間の心と言葉の問題を考える手がかりを示唆してくれます。子どもたちは、どんな言葉で自分の心を語ろうとしているのでしょうか。

母という存在とともに、子どもの言葉も、そして母と子の対話も、人間とは何かを明らかにしてくれる一つの鍵です。

ココロ（心）

三浦 泉（五歳七ヵ月）

「ウルトラマンハ  
シンダンジャナクテ  
ココロダケ  
シンダングダヨ  
……ココロガ  
クサッチャッタノカナ？」  
（お母さん）  
「……心ってなんだと思う？  
泉ちゃん？」  
「ワカラナイケド  
ココロッテ  
ミンナノコトラ  
カンガエルトコロダヨ」

オカアサント イウモノハ

三浦 泉（五歳七ヵ月）

オカアサン  
オカアサンテ イウノハ  
ヤサシインダヨ

ソレナノニ  
オカアサンハ  
イツモ イツモ  
ツヨク オコリスギル  
ソナニ  
オカアサント イウモノハ  
ツヨク オコルモノデハナイヨ  
オカアサンハ  
ツヨク オコリスギルカラ  
ジゴクヘ イクンダヨ  
ヤサシイオカアサンダケ  
テンゴクヘ イクノ……

## 〈第4章 人生と出会い—実存の視点〉

人生は一つの旅です。人は人と出会い、そしていつの日か別ればなりません。人生はいわば、出会いと別れの連続する旅です。

したがって、出会いと別れの意味を考えることは、人間と人生をいっそう深く考えることにほかなりません。「出会い」の哲学的・人間学的意味とはどのようなものでしょうか。このことを「実存」(Existenz)と呼ばれる考え方の視点で考えてみたいと思います。「実存」とはどのような意味をもった言葉でしょうか。そして「出会い」とは何でしょうか。いま少し掘り下げて考えてみたいと思います。

### 1 出会いの偶然と必然

#### (1) 「出会い」の語意

それでは、私たちの人生における「出会い」(Begegnung)とはいったい何でしょうか。それは、人と人が単に行き合うことでも単なる偶然でもないように思われます。だとすれば、それは何らかの必然でしょうか。

### 「外に出る」ということ

まず「出会い」という言葉のさまざまな意味を、辞書の中からいくつか拾い上げて考えてみます。「出会い」の語は、「邂逅」（かいこう）とも表現されますので、その両面から見ていきます。

- |  |
|--|
| ① 「出会い」… <u>出て</u> 会うこと。 <u>偶然</u> に会うこと。 <u>めぐりあう</u> こと。<br>邂逅。 <u>出て</u> 立ち向かうこと。(小学館『国語大辞典』) |
| ② 「出会う」… <u>出て</u> 行ってあう。 <u>出て</u> 立ち向かう。遭遇する。(同)   |

ここには、日常性からの脱出や遭遇性や偶然性が表現されています。

「邂逅」という言葉の意味を、同様に主なものを拾い上げてみると、つぎのようなものがあります。

- |  |
|--|
| ① <u>思いがけなく</u> 出会うこと。 <u>めぐりあう</u> こと。(同)         |
| ② <u>思いがけなく</u> 出会うこと。 <u>めぐりあう</u> こと。(岩波書店『広辞苑』) |

ここにも、遭遇性や偶然性が表現されています。

日本語におけるこれらの意味と、英語の encounter やドイツ語の Begegnung などは微妙な差もありますが、共に外に「出る」という意味を含んでいます。「出る」とは、「自分の殻を出る」とか「自分から外に出る」といった意味が隠されていると考えられます。すなわち、何らかの意味で自分の外に出て自分が変ることを意味しています。

また、「めぐりあう」という言葉には、たしかにある偶然性がこめられてはいますが、掘り下げていくと、あるおどろきや感動のひびきがあり、単なる偶然ではないもっと深い意味が隠されているように考えられます。日常性からの変容を意味しています。出会いによって私たちの人生の何かが変ることを意味しています。

### (2) 「実存」の語意と「出会い」

ここで**実存 (Existenz)** という言葉の語意を、あらためて整理してみます。「実存」(existence) の語源は、existere (…から外に出て立つ、現われる) というラテン語です。すなわち、「実存」とは、「本質存在としての自己のわくに閉じこめられないで本質の外に出て立つ」という意味です。すべての人間の共通性とか「共通のありよう」(本質存在)ではなく、いま、ここに生きている私たち一人ひとりの「ありよう」(存在)

を指しているのです。そして、そのことによって自己が変容していくという意味を含んでいます。

私たちの「出会い」の体験は、よく考えてみると、自己から外に出ていくという根源的な契機を持っています。辞書の中の「出会い」という言葉がそのような語意をもっていることは前に述べたとおりです。そうすると、「出会い」とは、きわめて**実存的な体験**と考えられます。

### (3) 「出会い」と「行き会い」

このように考えてくると「出会い」とは、どこかで、誰かと単に行き会うことではなく、自分が何らかの意味で変っていく深い契機だと考えることができます。そしてそれは、一見偶然のように見えて、けっして偶然ではない、実存的な人生のできごとと言わねばなりません。「出会い」は、単なる「行き会い」や「行きずり」などではありません。私たちの内面の大きな変化をもたらしている出来事なのです。

そのような意味で梶田啓三郎はつぎのように言っています。「邂逅とは、単に途上で行き会うことでなく、呼びかけに応えることであり、応えうる者のみに恵まれる運命的な出会いである。」(梶田啓三郎)

「運命的」とは、単なる偶然ではない**内的必然**を意味する表現と考えてよいでしょう。

また、仏教学者紀野一義はつぎのように言っています。「ただ会うというのではない。生涯にただ一度とでもいうべきいのちのふれあいがそこになければならぬ。それがなくては、めぐりあいとはいわれぬ」(紀野一義)

紀野一義は、「いのちのふれあい」という表現で、「出会い」のもつ内面性や根源性を言おうとしているのです。

さらに、J. Pサルトルはつぎのように言っています。「出会い」が単なる他者との行き合いや他者の認識ではなく、いきいきとした「生」(せい)の体験であることを言おうとしたものです。

「他者の存在は、ア・プリオリに演繹される概念でもなく、蓋然的な対象でもなく、**直接的な把握**が出会いであり、出会いは他者体験の事実

である。私は、他者を認識するのではなく、他者に会うのである」(松浪信三郎・J.Pサルトル『存在と無』用語解説)

Hegel (1770~1831)<sup>(5)</sup> にも、「出会い」を考える上できわめて示唆的な言葉がありますが、引用したこれらのことばは、いずれも、単なる偶然のできごとではない実存としての「出会い」の必然性を考えさせてくれる示唆的な内容です。「必然」とはいったいどういうことでしょうか。

## 2 出会いの主体性

### (1) 間主体的存在

「間主体的」ということ

それでは、「出会い」を、人と人の間の人格的な関係として考えると、どのようなものとしてとらえられるでしょうか。ここでマルティン・ブーバー (Martin Buber, 1878~1965) の思想にそって人間と「出会い」の問題を考えてみましょう。

ブーバーは、人間を「間 (あいだ)」という概念でとらえた人です。その人間論は、人と人の関係を〈我-汝〉(私とあなた) という関係を問題にする間主体的人間論と呼ばれる考え方です。それでは「間」とか「間主体」という概念はどのような意味をもち、どのような背景から生まれてきたものなのでしょうか。

それは、近代に始まった人間の孤立化、アトム化、すなわち人間相互の疎隔 (そかく)、人格的関係の喪失という時代の病根を洞察し、「他者との対話」の深い意味をあきらかにしようとするものでした。言いかえれば、人間の基本的なあり方を、人間存在の**共存性** (共に生きる存在) においてとらえようとするものでした。

ブーバーにおける「出会い」

この間主体的人間論の中で「我」と「汝」という言葉が出てきますが、ブーバーは何を言おうとしたのでしょうか。「我」とはドイツ語の Ich (英語の I) を訳したものです。「汝」とはドイツ語の Du (英語の You)

(5) ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) はドイツの哲学者。ドイツ観念論の完成者。

を訳したものです。要するに「わたしとあなた」の関係・意味を考えようとしたのです。あるいは、「自己」と「他者」の関係と言ってもいいかもしれません。

それでは、ブーバーにとって、**出会い** (Begegnung) とは、どのようなものであったのでしょうか。一口で言うと、それは「関係」や「間」(あいだ) の概念でとらえられたものでした。すなわち、出会いとは、〈我と汝〉という**人格的關係**において成り立つものだとする考え方です。それは、我と汝が互いに向かい合って、開けた心で直接的な人格関係を結ぶ相互的關係です。その関係において生起する**人格的な出来事**です。

「人格的關係」とか「人格的な出来事」と言った場合の**人格的**とは、どのような意味でしょうか。平たく言えばそれは、深い人間性(人格性)に基づいた関係を意味します。もっと常識的な言い方をすれば人間を人間(人格)としてみる人間らしい関係です。

したがって、この「出会い」によって生ずる関係、すなわち〈我-汝〉(Ich-Du) の関係を、ブーバーは、〈我-それ〉(Ich-Es, I-It) の関係と明確に区別します。〈我-それ〉の関係とは、「我」の対象「それ」が人間らしい対象とみられていない関係です。この〈我-汝〉と〈汝-それ〉とは、ブーバーの二つの根源語であり、これによって、その「間主体的人間論」が展開されるわけです。それでは、〈我-汝〉の関係とはどのようなものでしょうか。

## (2) 間柄的存在

### 「人間」という言葉

〈我と汝〉の関係を考える前に、すでに説明してきたことですが、もう一度**「人間」という言葉の意味**を整理しておきます。人間は、たった一人では人間とは言えません。日本語では、「人間」という言葉を〈人の間〉と書くように、人間という存在は、つねに人と共に存在し、人と人の間に成り立っている存在なのです。われわれが生まれてくるということは、人と人の間の「間柄的存在」として生まれてくるということです。生きているということは、一人一人違った存在であると同時に、「共に生きている」ということであり、いま、ここにいる私たち「人間」は「共存在」だということです。

### 「ひと」という言葉

日本語の「人間」という言葉がこのような深い意味を含んでいるように、「ひと」という日本語もまた人と人との関係の意味を内に含んでいます。それは、どんな関係でしょうか。

たとえば次のような言い方を考えてみます。「人と人の間」という視点でこの表現を見ていくとどうなるでしょうか。

- ア. ひとに本を贈る。ひとをあたたかく包む。
- イ. ひとのせいにするな。ひとを馬鹿にするな。
- ウ. ひとが言っているよ。

アの「ひと」は自分（自己）に対する相手（他者）を指しています。この場合の「ひと」は相手（他者）の意味です。イの「ひと」は相手（他者）からみた自分（自己）を意味しています。この場合の「ひと」は自分（自己）の意味です。ウの場合は、それを含む世間全体を意味しています。このように「ひと」という日本語が、すでに間柄的な概念であることがわかります。平たく言えば関係的な意味をもっています。

「ひと」が「間」において成り立っていることを意味しているのです。

### 「倫理」という言葉

ここで、たとえば人間だけが持っている「倫理」という言葉を考えてみましょう。

間柄的存在であるということは、人間が本質的に「なかま」としての存在であるということです。「倫理」と呼ばれるものはその中に生まれているのです。「倫」とは「なかま」の意味であり、倫理とは「なかまの道」を意味する言葉です。人間は本質的に倫理的・道徳的存在であり、「倫理」とは人と人になくはならぬ道や秩序を意味する言葉なのです。

そのような道徳的・自律的存在としての「人間」あるいは「人間性」を、カントは「人格」と呼びました。ブーバーもまた〈我-汝〉の「我」を人格（Person）と呼んでいます。それでは、ブーバーはどのような意味においてそれを考えたのでしょうか。

### (3) 「我」の二重性

#### 「我」の二つの相一人格と主我存在一

先に述べたように、Ich とは I (我) であり、du とは you (汝) を指します。ブーバーは、その関係が、真に「人格的な」場合とそうでない場合とを考えたのです。「人格的」とは、わかりやすく言えば、人が真に尊厳をもった存在であることを意味した表現です。

それでは、「我-汝」の人格的關係をあきらかにしようとするブーバーにとって、「我」とはどのような姿をしているのでしょうか。

少しむずかしい言い方になりますが、ブーバーは、「我」の姿には、**人格 (Person)** としての「我」と**主我存在 (Eigenwesen)** としての「我」があると述べています。そういう**二重性**を持っているというのです。それでは、「人格」と「主我存在」とはどのような違いがあるのでしょうか。

「人格」とは上に述べたように尊厳をもった存在です。ところが「主我存在」とは、人間が、どこかにもっている「自分を中心とした姿」です。それゆえに相手の存在を人格としてとらえきれないでいる時の姿を指しています。そして、ブーバーによれば、「人格」も「主我存在」も、人間の「我」のそれぞれの相(姿)です。現実の人間は、人格と主我存在という人間性の二つの極のもつれ合いとその緊張関係の中に生きているというのです。人は、人格と主我存在の間を行ったり来たりしているのです。言いかえれば、現実の人間は、〈我-汝〉(Ich-Du) の我と〈我-それ〉(Ich-Es) の我との交替・変化のうちに生きているというのです。

彼が、このことをとりわけ強調しているのにはそれなりの理由や背景があります。

私たちが生きている現代という時代は、その「人格としての我」の意味が後退し、希薄になりつつある時代とも言えるからです。人間が人間らしさを失いつつあるのです。すなわち、「共存在」(共に生きている存在)の意味が薄れつつある時代なのです。そんな時、人間を単に「主体」と「客体」の対立的関係でとらえないで、**間主体的存在**としてとらえることが、いま一度必要になりつつあるのだと、ブーバーはそう考えていました。「間主体的」とは、〈我と汝〉と言う時、「我」を主体、「汝」を客体としてとらえないで、**我も汝も主体**とする考え方です。「人格」と

しての「我」と「人格」としての「汝」を共に言い表すと「間主体」と言うことができます。それは、他者を単なる客体としてとらえない考え方です。よく考えてみれば自己も主体であり、他者も主体なのです。すなわち〈我－それ〉の関係としないということです。〈我－それ〉とは「我」が主体であり、「それ」は客体なのです。しかも、「我」にとって利用価値のある存在なのです。

### 〈我－それ〉の関係―他者の手段化―

それでは、そのような視点に立って、〈我－それ〉の「我」である「主我存在」について、いまま少しまとめておきましょう。

主我存在とは、存在者を対象として、つまり〈それ〉として表象し（とらえ）、観察し、認識する主観であり、存在者を利用したり、手段として用いたりする主体です。すなわち、自己欲望にとらわれた**自我中心的な我**です。

主我存在は、対象化されたすべての存在者（客観界）を、自己にとっての有用性の程度においてその意義を格付けします。すなわち、すべての存在者を自己にとっての有用性（＝使用価値）という尺度で計ります。自己に対するすべての存在者すなわち「他者」は、その有用性の度合によって、すなわち「どれだけ役に立つか」ということでランク付けされるのです。その場合の「他者」を「それ」と表現しているのです。

このような「主我存在」の視点は、単に物の世界を「それ」としてとらえるだけでなく、存在者としての人間の世界も同様にとらえます。たとえば「この人は、自分にとってどれだけ有利な存在であるか」といった見方で人を見ようとします。「有用性」の程度からの格付けでは、人格価値が使用価値の観点から見られ、人間の物件化、非人格化が生じます。ここには、先に見てきた「出会い」の関係は成り立ちません。

こうして、主我存在としての我は、すべてを利用し、できるだけ多くを自己の所有にしようとする主体として、人間生活の維持、利便、安楽などの〈それ〉の世界の目的実現をめざします。そのために**存在者を手段化**していきます。言わば、「それ化」していくのです。

### 〈我-汝〉の関係—他者の主体化—

人間と人間の関係が、果たしてこのような交わりでいいのだろうか、というのがブーバーの問題提起なのです。このような視点から、ブーバーは、人間存在の真のあり方を問うているのです。

もとより人間は、〈それ〉なくしては生きてゆくことはできないし、生活を維持することはできません。私たちはさまざまな事物を〈それ〉として有用し、活用しつつ生活を利便化し、快適化しているのです。

だが、すべてを〈それ〉としてのみ生きる人間は真の人間とは言えないでしょう。つまりすべての存在者を対象化し、「それ化」してしまう主我存在的なあり方は、自己自身をも「もの化」していくあり方になり、それはもはや人格としての人間とは言えないのです。

そのような、真の人間とは言えない人間を、〈人間〉として回復する道を、ブーバーは〈我-汝〉の関係の中に見出そうとします。〈我-汝〉の我は、先に述べたように「人格」としての我です。人格としての我は、〈我-それ〉の関係に見られるような二格をもたない主体性だと言われています。すなわち、そのような限定性を越えたところに現れる我だと言われています。したがって〈汝〉とは、単なる対象や他者としての〈それ〉ではなく、主体性をもった他者のことです。「我」も「汝」も共に主体なのです。「間主体」とはそのような考え方から出てきた概念です。

したがって、そのような〈我〉は、対象把握的・表象的認識を超えて、他者を主体性として覚知する我です。また、他者を自己の手段として利用する自我中心的な立場を超えて、他者を使用価値とはけっして置き換えられない**人格価値**として受け入れる、〈開けた我〉です。〈開けた我〉とは、もっと突っ込んで考えるとどのような意味をもつのか、ということについては後で述べることにしましょう。

#### (4) 精神としての人格

##### 出会いとしての人格

このような意味の**人格**とは、心身が一つになった具体的・全体的な人間を意味しています。

ブーバーは、この全体としての人間をとくに「**精神**」と呼んでいます。

もう少し強調して言えば、真の人格性としての「精神」という意味です。そして、人格は、他の人格との誠実な関係の中に入ることによって、はじめて真の人格性、すなわち「精神」として現れるというのです。

ブーバーが、人間を「間」（あいだ）として、すなわち「関係」においてとらえているのはそのような意味です。したがってまた、それは、**人格と人格の応答的・対話的關係**としての「出会い」においていっそう明らかにされるものです。

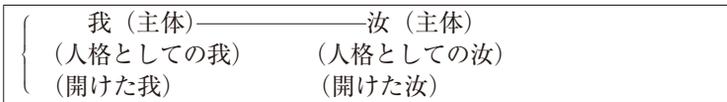
「応答的・対話的關係」とは、わかりやすく言えば、**人格と人格がひびき合う関係**、心と心の通じ合う関係です。人と人がひびき合い、通じ合うとは、人と人が深い意味の精神的関係を結ぶことなのです。

### 出会いの力—開けた我—

人間を「間主体」としてとらえた「出会い」の意味は、もう少し詳しく表現すると、次のように言えます。

人格の応答的・対話的關係は、**開けた我**において成り立つ関係だとブーバーは考えています。この「開けた我」において、はじめて**出会い**というものが生じるのです。「開けた我」においてひびき合いが成り立つのです。

すなわち、〈開けた我〉対〈開けた我〉、あるいは、主体性対主体性の関係において生起するのです。「我」（人格としての自己）と「汝」（人格としての他者）との出会いによって、人間は真に人格として、〈我—汝〉の関係における我として具現します。



さらに言えば、この関係は、**人格と人格の責任ある関係**であり、それは、**我の自己実現が同時に汝の自己実現に連なる関係**です。

ブーバーのこのようなとらえ方から、われわれは、「出会い」を**主体性・内発性**として理解することができます。「出会い」とは、単なる「行きあい」ではなく、人格のもつ「**出会う力**」、「**ひびきあう力**」の交わりです。「開けた我」のもつ間主体的な力のひびき合いです。先に、人間

を「間柄的存在」としてとらえたのもそのような意味でした。

出会い（邂逅）とは、そのような意味でいのちのふれ合いであり、いのちのひびき合いです。そして、われわれにそのようなひびき合う力がなかったら、すなわち**出会いの力**がなかったら、人と人との出会いも、一冊の本との出会いも、ただのゆきずりに終わってしまうでしょう。**ひびき合い**によって、われわれは自分の外に出て自分を変えていきます。自分が新しく生まれていきます。「実存」とはそういうものです。

### 内的必然として

したがって出会いとは、外から起こってくる偶然のように見えて、けっして単なる偶然ではありません。それは、内から、すなわち**内発的・主体的に、「内的必然」として**起こってくるものと言うことができます。「内的必然」とは、私たちの魂の内面が求めてやまないものです。自分の魂の内面に求めるものがなかったら、すなわちよく生きようとする「内的必然」や主体性がなかったら、どんなすばらしい人間（人格）と対面しても、それは単なる行きずりになってしまうのです。私たちが求める何ものかを胸に秘めている時、相手が求める何ものかと触れ合うことができます。

次に述べる二つの言葉は、われわれにそのことを示唆してくれます。

一つは聖書の中の有名な一節です。道を求めようとする止むに止まれぬ、主体的な姿勢を示唆している言葉です。

- ・ マタイによる福音書（7の7～12）、ルカによる福音書（11の9～13）  
「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。門をたたきなさい。そうすれば開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」

- ・ ゲーテ<sup>(6)</sup>の言葉（学生 W. ドローへおくれた言葉）

いま一つは、ゲーテの言葉です。これも求めて止まぬ主体的な生き方を教えています。戯曲『ファウスト』や小説『ウィルヘルム・マイスター』、自伝『詩と真実』などを書いたドイツの詩人ゲーテに次のよう

(6) ゲーテ（1749～1832）Johann Wolfgang von Goethe

な言葉があります。

「神様は、胡桃(くるみ)を与えるが、それをかんで割ってはくれない」  
味わうべき言葉です。

### 3 出会いと覚醒

#### (1) いのちの呼応

##### 応答・対話の関係

上に述べてきたように、「出会い」とは、人格の応答的・対話的關係です。言いかえれば、人と人がほんとうの意味で「出会う」とは、**人生の呼びかけがある**ということであり、その呼びかけにこたえていくということです。さらに言葉をかえれば、それは**単なる偶然**ではなく、**いのちの呼応**であり、そのことによって**他者が自己の中に生きつづける**ということです。したがって、真に人格と人格の出会いを生起するものは、先に述べた「**内的必然**」が秘められていることだとも言うことができるのです。

ボルノウ (O. F. Bollnow 1903~1991) は、**邂逅** (出会い) はつねに「**実存と実存との触れ合い**」であり、「**実存的邂逅**」(existentielle Begnung) だと言っています。邂逅 (出会い) とは、突然に呼び起こされる行為であり、ハイデッカー的意味での「**非本来的な**」生の根本的転回が、すなわち**本来性への目覚め**が、それによって起こされるという性格のものです。

人生という旅は、親と子の出会いから始まる、実に不思議な出会い(めぐりあい)の連続とも言えます。もっと言えば出会いと別れの連続する旅路です。そして、その旅路のさまざまな出会いは、人生の呼びかけにこたえるという形で恵まれる運命的な出来事とも言えましょう。ボルノウはこれを「**苛酷さ、仮借の無さ、不可避性**」といった表現で説明しようとしています。避けることのできない運命的な出来事だということを言おうとしているのです。私たちは、「**苛酷さ**」とか「**仮借の無さ**」といった表現の意味することをあらためて考えてみる必要があるように思います。それほど厳粛でかけがえのない**生**を私たちは与えられているのです。

## 開眼と転身

そのような意味で、出会いは、人生の重大事件とも言うべきものであり、私たちにさまざまな開眼をもたらし、さまざまな転身を迫るものと言えます。それによって、私たちの人生が大きく変わっていく大きな出来事なのです。

昭和の文芸界において多くの若者たちの心をとらえ、太宰治らとも深い交友のあった亀井勝一郎は、出会いの持つそのような意味を次のように述べています。

「…邂逅とは奇跡のようなものなのだ」（『日本の知恵』）

それは単なる偶然ではなく、奇跡に近いと言っていいほどの**人生の重大事**だと言う意味でしょう。

## (2) 連続性から非連続性へ

### 成長の非連続性

ここで、「人間形成」という視点から「出会い」の意味を考えてみましょう。言葉をかえれば教育の視点で考えるということです。

人間の精神的成長発達の過程には、連続的なもの（連続的形式）と非連続的なもの（非連続的形式）があるとボルノウは考えました。連続的な人間形成とは、精神的成長発達の過程を、連続的に進行するものとしてとらえるものです。

精神的成長発達は、連続的な積み重ねと継続によっておこなわれるものです。しかし時に足踏み状態が長く続くこともあれば、ある時突然、**飛躍的な成長**として起こることもあります。ある時強い精神的衝撃で、すなわち人生の大きな出来事（出会い）によって「はっ」と目覚めることがあります。深い**精神の覚醒**です。その「飛躍」を「非連続」と言っているのです。それは、非連続的な人間形成であり、「覚醒」です。

ボルノウは、**覚醒の概念**に2つの特徴を取り出しています。それは、**突然性の要素**と、**眠りから目覚めへの推移**の2つです。そして次のように言っています。「覚醒とはそれゆえに、非本来性の状態から本来性の状態への呼び起こしである」。さらにまた、「覚醒とはまず宗教的概念であり、知識の解放ではなく、最内奥の核心そのものの解放なのであって、

核心は卒然たる回心によって自己自身へと、すなわちそのもっとも固有な存在へともたらされる」とも言っています。

回心 (Conversion, die Bekehrung) とは、もともと宗教的概念であり、過去を悔い改めて神の正しい信仰へ心を向けることです。ボルノウは、人間の「出会い」の中に、そのような深い目覚め (覚醒) を見ていたのです。

### 飛躍の契機

ところで、われわれの成長の過程においては、否定的・消極的と見られがちな**精神の危機的状況**がむしろ成長の契機となり得ることがあります。それは、人生の転機となる大きな覚醒を促すものでもあります。深い悲しみや苦しみが、われわれを深い覚醒に導くことがあります。

このことについてボルノウは、人生の危機は人間の本質に属するものであり、人間の自己生成にとって必須のものであるとして、次のようにも言っています。

「…危機を勇気をもって持ちこたえることによって、人間の生は純化され更新されるのであり、これは他の方法では得られない。」

人生の「負」(マイナス)と思われるものが、実は「正」(プラス)への秘めた力であることを示唆される言葉です。

### 結び—自己の中の他者

出会いとは、自己の中に他者を見出すことです。また、他者の中に自己を見出すことです。それは、「開けた我」において見出される関係です。言葉をかえれば、それは、**魂の解放**であり、**人格と人格の深い結び**合いです。そうして、「他者が自己の中に生きつづけること」なのです。

(了)